

# 「新しい生活様式」に向けた 青少年の野外教育による生活様式変容把握の構想

白木 賢 信

## 抄 録

本論文は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行を受けて、「新しい生活様式」に向けた野外教育による生活様式変容把握の構想を提示しようとするものである。事例を用いた検討の結果、野外教育参加者の生活様式変容度及び期待度の領域による差異は見られないが、「生物的機能維持の領域」における検討によると、特に「帰宅時に手洗いうがいをすることができる」については上記両者の差異は殆ど無いことが判明した。この項目が「新しい生活様式」として重要になると考えられることから、今後追跡的に調査及び分析を加えていく必要がある。

キーワード：野外教育、生活様式、生物的機能維持の領域、文化変容

### 1. 本論文の目的

ここでいう青少年の野外教育（以下、野外教育）による生活様式変容とは、野外教育事業への参加者（青少年）の事業参加後の日常生活における行動様式変容である。この変容は野外教育の成果の1つであるにもかかわらず、野外教育の目的達成との間に必ずしも親和性の高い特徴が見られないという問題意識を受け、筆者はこれまでに野外教育の目的達成と生活様式変容の関係の特徴を探ってきた<sup>1)</sup>。特に関係構成の観点からの検討により<sup>2)</sup>、事業直後から事業1ヶ月後に移ると、両者の間に親和性が高くなることが判明した。この特徴には、両者の間の関係のみならず、野外教育プログラムの運営や野外教育における技術習得が側面的にかかわっていることも示唆されている<sup>3)</sup>。

一方、2019年末からの新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行による影響は野外教育にあっても例外ではなく、2020年度夏季事業（夏季開催の組織キャンプ等）の実施を困難にさせている<sup>4)</sup>。だが、野外教育に必然的に備わる自然における開放性（気密性の低さ）は、他領域の教育・学習活動の殆どに見られない利点でもあることから、活動の在り方の見直しによっては新たな推進の可能性も秘めている。その在り方の見直しの1つに「新しい生活様式」（新型コロナウイルス感染症対策専門家会議提言（2020年5月4日））への対応が挙げられるが、これは当初いわゆるコロナ禍における一過性のものとして捉えられていたものの、ウィズ（with）コロナ、ニュー・

ノーマル (New Normal)、グリーン・リカバリー (Green recovery) などと相俟って、今後の社会変革をも期待する概念にシフトしつつあるように思われる。

本論文は、このような背景を受けて、「新しい生活様式」に向けた野外教育による生活様式変容把握の構想を提示しようとするものである。但し本論文では、提示された構想の有効性などの検証までは行わない。このような検証については、今後「新しい生活様式」の習得などのデータ収集を行う計画であるので、そのデータを用いて行うことにしたい。

## 2. 研究方法

前章で示した本論文の目的を達成するため、今回は生活様式と文化変容の考え方を援用した研究方法を用いることにした。先に両者について説明しておこう。

まず生活様式について、ここでは狭義の生活様式の立場を取っている<sup>5)</sup>。狭義の生活様式では、生活のすべての領域にかかわる技術またはその組合せで、それは生活におけるさまざまな領域と結び付いて表出される。これらの領域は、生活を存続させるために必要な機能的条件で見れば、図1の6領域が挙げられる<sup>6)</sup>。なお、F.の領域はその他の5領域とそれぞれ結び付くことを意味している。生活様式は、この機能遂行のための技術であるから、各領域にさまざまな生活様式が存在する。もちろん複数の領域にまたがって表出する生活様式もある。但し、本論文では、事業参加者として想定される青少年の特徴を考慮して、差し当たり A.B.E.F. の4領域に限定して検討を行う。

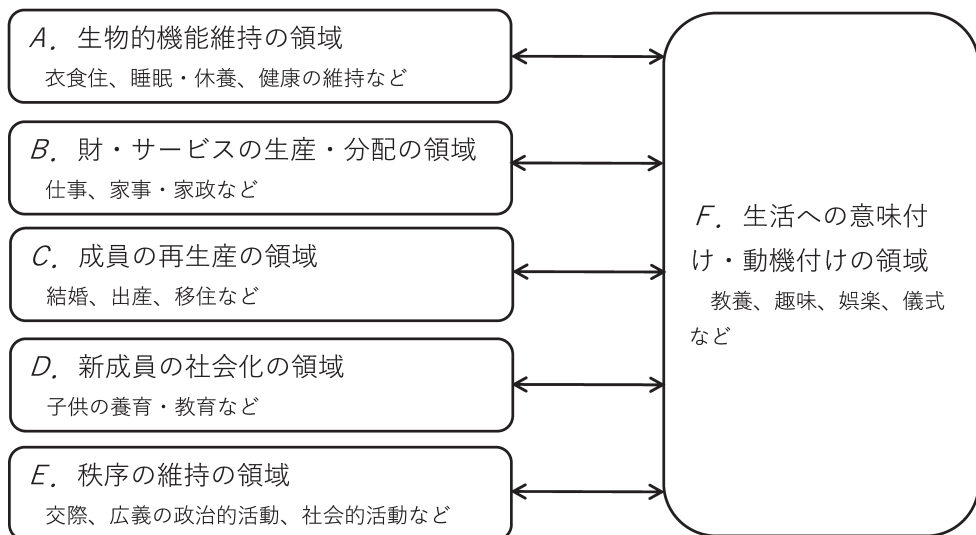


図1 生活様式の領域の構造

(白木賢信 (2007) 「生活様式枠組と生涯学習研究」をもとに本稿用に作図)

次に、ここでの文化変容は生活様式変容を捉える観点として設けている。ふつう変容とは、姿や形が変わること、あるいは変えることで、これは既に存在しているものの変化を言う。但し学習にあっては、何らかの生活様式が新たに形成されることも多く、そのような場合であっても、学習者の生活様式の全体像は変わることになるので、ここでは新たに生活様式が形成されることも含め、形成と変化を合わせて変容と呼んでいる。このような変容を捉える観点について、山本恒夫は文化変容の考え方を導入している<sup>7)</sup>。一般に文化変容とは、異なった文化伝統を持つ複数の社会（人間集団）が出会うことで相互に影響し合う際に見られる変化の過程であるが、その考え方で生活様式変容を捉えたと、次の(1)～(3)の過程を経ると考えられる<sup>8)</sup>。

- (1) 新たな生活様式が導入されるまでは、それまでに定着していた生活様式が平衡状態を保っている。
- (2) そこに新しい生活様式が導入されると、既存の生活様式が解体され、平衡状態が崩れて、一種の緊張状態に陥る。
- (3) しかし、やがて、新しい生活様式を取り入れた再統合がなされ、再び新しい平衡状態を作り出す。このようなプロセスを経て、新しい生活様式が定着する。

上述の過程を実証研究などで把握するためには、文化で捉えた生活様式の特徴をデータ化する作業が必要となる。それは例えばコード変換などの作業によるが、そのための客観的なデータ化の基準が求められ、その1つの方法として幾何学的形態測定学（geometric morphometrics）における形態と形状の把握がある<sup>9)</sup>。形態（size shape）とは、回転、平行移動、拡大縮小に対して不変な幾何学的情報で、形状（shape）とは、回転と平行移動に対して不変な幾何学的な情報である。両者の違いは拡大縮小に対して不変かどうかで、形態はサイズ（拡大縮小によって変化する量）の情報を含むが、形状は含まない（図2を参照）。

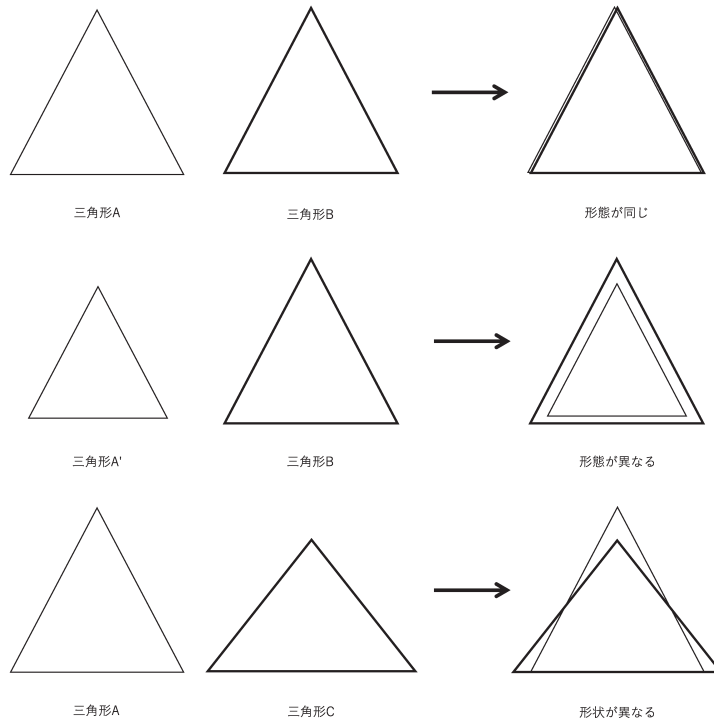


図2 形態と形状の違い  
(田村光平 (2020) 『文化進化の数理』 p.208の図5.9を引用)

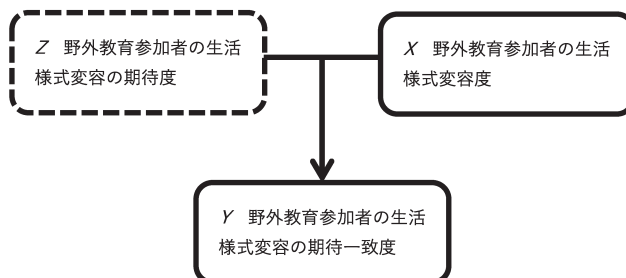
その上で、具体的な検討にあたっては、筆者が調査研究協力者としてかかわった独立行政法人国立青少年教育振興機構国立中央青少年交流の家（静岡県御殿場市）平成29年度教育事業「富士サマーキャンプ」（以下、事業）で収集した調査データを用いることにするが、本論文にかかわる調査概要は表1の通りである。なお、このデータ使用については事業主催者（国立中央青少年交流の家所長）からの許可を得ている。

表1 調査の概要

1. 調査内容
<p>X 野外教育参加者の生活様式変容度</p> <p>Y 野外教育参加者の生活様式変容の期待一致度</p>
2. 調査対象
<p>野外教育の参加者の保護者</p>
3. 被調査者(サンプル)数、回収数、回収率
<p>国立中央青少年交流の家平成29年度教育事業「富士サマーキャンプ」(以下、事業)</p> <p>(2017年8月6日(日)～12日(土),6泊7日)における参加者の保護者</p> <p>参加者(小学5～6年生)の保護者 35名、35名、100%</p>
4. 調査方法
<p>郵送法</p> <p>※国立中央青少年交流の家が被調査者の自宅宛に調査票(質問紙)を郵送した。</p> <p>被調査者は回答後、調査票を国立中央青少年交流の家に返送(郵送)した。</p>
5. 調査時期
<p>2017年9月11日(月)～9月29日(金)(事業終了1ヶ月後)</p> <p>※上記期間を調査票(質問紙)への回答期間とした。</p> <p>未回収の調査票については該当の被調査者に督促を行い、10月19日(木)に回収を完了した。</p>

なお、今回の調査におけるデータ把握の枠組を示すと、図3の通りとなる。Zの野外教育参加者の生活様式変容の期待度のデータ収集を行っていないため、XおよびYから推定することになるが、その計算式を(1)と捉えることにした。

$$Z=3X/Y \quad \dots(1)$$



実線：本調査でデータ収集した項目      点線：本調査ではデータ収集しなかった項目

図3 調査におけるデータ把握の枠組

### 3. 研究結果

#### (1) 基礎集計結果

調査の基礎集計結果については既報のため<sup>10)</sup>、ここではその概要のみ示すと表2の通りである。野外教育参加者の生活変容について、日常生活における行動の仕方の変容、その期待一致度の両者とも、最も高い項目が「山や動植物に興味を持つことができる」で、最も低い項目は「ゲームやテレビ視聴を決めた範囲でできる」であった。その上で、野外教育参加者の生活様式変容度 (X)、変容の期待一致度 (Y)、及び期待度 (Z) を生活領域別に示したものが表3である。いずれの領域にあっても3点台であるが、それぞれの差異については次節で検討を加えることにしたい。

表2 基礎集計結果

No.	項目	n	X 野外教育参加者の生活様式変容度		Y 野外教育参加者の生活様式変容の期待一致度	
			平均 (標準偏差)	順位	平均 (標準偏差)	順位
1	早寝早起きを規則的にすることができる	35	3.37 ( 0.77 )	13	3.23 ( 0.81 )	12
2	好き嫌いなく食事をすることができる	35	3.46 ( 0.70 )	10	3.34 ( 0.68 )	10
3	気候にあわせた服装を選ぶことができる	35	3.60 ( 0.81 )	8	3.46 ( 0.78 )	8
4	帰宅時に手洗いうがいをすることができる	35	3.23 ( 0.65 )	15	3.17 ( 0.79 )	15
5	自分の身の回りの片付けができる	35	3.57 ( 0.70 )	9	3.29 ( 1.13 )	11
6	決められた家事や手伝いをするができる	35	3.69 ( 0.80 )	3	3.57 ( 0.85 )	6
7	学校などに持って行く物の準備ができる	35	3.69 ( 0.87 )	3	3.54 ( 0.85 )	7
8	宿題などの勉強に取り組むことができる	35	3.69 ( 0.76 )	3	3.60 ( 0.74 )	5
9	家で決められた約束事を守ることができる	35	3.46 ( 0.89 )	10	3.23 ( 0.91 )	12
10	起床就寝や外出帰宅時の挨拶ができる	35	3.74 ( 0.85 )	2	3.69 ( 0.87 )	2
11	他の人にしてほしいことの説明ができる	35	3.34 ( 0.76 )	14	3.23 ( 0.84 )	12
12	交通ルールを守ることができる	34	3.68 ( 0.88 )	7	3.68 ( 0.88 )	3
13	ゲームやテレビ視聴を決めた範囲でできる	35	3.14 ( 0.81 )	16	2.97 ( 0.86 )	16
14	山や動植物に興味を持つことができる	35	3.86 ( 0.77 )	1	3.80 ( 0.83 )	1
15	進んで読書に取り組むことができる	35	3.40 ( 0.74 )	12	3.40 ( 0.91 )	9
16	進んでスポーツに取り組むことができる	35	3.69 ( 0.72 )	3	3.63 ( 0.77 )	4

注1) 各項目は、生活機能の考え方(Bennett&Tumin(1949))による生活領域のうちの4領域に限定し、その各領域にかかわる行動の仕方である。No.1~4は生物的機能維持の領域、No.5~8は財・サービスの生産・分配の領域、No.9~12:秩序維持の領域、No.13~16は生活への意味付け・動機付けの領域である。

注2) Xにあつては「キャンプ前と比べて変わったか、変わらないか」について、各項目で「キャンプ前よりできる」を5点、「どちらかといえばキャンプ前よりできる」を4点、「キャンプ前と変わらない」を3点、「どちらかといえばキャンプ前よりできない」を2点、「キャンプ前よりできない」を1点として得点化した。

注3) Yにあつては「Xは回答者(保護者)の期待通りであったか、違っていたか」について、各項目で「期待以上である」を5点、「どちらかといえば期待以上である」を4点、「だいたい期待通りである」を3点、「どちらかといえば期待以下である」を2点、「期待以下である」を1点として得点化した。

注4) 表中の数値は、原則としてそれぞれ小数第3位を四捨五入した。

注5) XYそれぞれについて、平均値の高い項目順に順位を付けた。

表3 生活領域別にみた野外教育参加者の生活様式変容度、変容の期待一致度、及び期待度  
(N=35)

生活領域	X 生活様式変容 度平均値 (標準偏差)	Y 生活様式変容 の期待一致度 平均値 (標準偏差)	Z 生活様式変容 の期待度平均値 (標準偏差)
生物的機能維持の領域	3.41 ( 0.48 )	3.30 ( 0.56 )	3.18 ( 0.42 )
財・サービスの生産・分配の領域	3.66 ( 0.56 )	3.50 ( 0.69 )	3.28 ( 0.59 )
秩序の維持の領域	3.55 ( 0.66 )	3.46 ( 0.70 )	3.18 ( 0.56 )
生活への意味付け・動機付けの領域	3.52 ( 0.49 )	3.45 ( 0.57 )	3.16 ( 0.36 )

表中の数値については、原則として小数第3位を四捨五入した。

## (2) 生活領域別にみた野外教育参加者の生活様式変容度の分析

前節を受けて、本節ではまず野外教育参加者の生活様式変容度 (X) について生活領域別の分析結果を提示したい (表4参照)。「キャンプ前と変わらない」の3点を基準値として母平均の検定を行ったところ、いずれの領域も0.1%水準で有意差があった。なお、この差はあくまでも変容度についてであるので、参加者が元々どの程度生活様式を習得しているかどうかを捉えているものではない。

表4 生活領域別にみた野外教育参加者の生活様式変容度

(N=35)

生活領域	生活様式変容度 平均値 (標準偏差)	母平均検定結 果：比較値3 t値
生物的機能維持の領域	3.41 ( 0.48 )	5.10 ***
財・サービスの生産・分配の領域	3.66 ( 0.56 )	6.95 ***
秩序の維持の領域	3.55 ( 0.66 )	4.94 ***
生活への意味付け・動機付けの領域	3.52 ( 0.49 )	6.24 ***

\*\*\* $p < .001$

表中の数値については、原則として小数第3位を四捨五入した。

### (3) 生活領域別にみた野外教育参加者の生活様式変容の期待度

次に、前章で示した(1)から野外教育参加者の生活様式変容の期待度 (Z) を算出し、その上で生活領域別の分析結果を示してみよう (表5参照)。表4と同様、「キャンプ前と変わらない」の3点を基準値として母平均の検定を行ったところ、「財・サービスの生産・分配の領域」は1%水準、「生物的機能維持の領域」と「生活への意味付け・動機付けの領域」は5%水準で有意差があったものの、「秩序の維持の領域」は有意差が無かった。

表5 生活領域別にみた野外教育参加者の生活様式変容の期待度

(N=35)

生活領域	生活様式変容の 期待度平均値	領域間有意差 検定結果
	(標準偏差)	t値
生物的機能維持の領域	3.18 (0.42)	2.58 *
財・サービスの生産・分配の領域	3.28 (0.59)	2.80 **
秩序の維持の領域	3.18 (0.56)	2.91
生活への意味付け・動機付けの領域	3.16 (0.36)	2.59 *

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

表中の数値については、原則として小数第3位を四捨五入した。

### (4) 野外教育参加者の生活様式変容度及び期待度の幾何学的形態測定学的検討

前節までの分析結果から、野外教育参加者の生活様式変容度 (X) 及び期待度 (Z) の間の差異を検討することにしよう。まず表4と表5の結果を配分円形線図表で示したものが図4あるが、この図によると、領域ごとにXとZの差を把握することができる。具体的な数値差を示した表6によると、「生物的機能維持の領域」は5%水準、その他の領域はいずれも1%水準で有意差があったことから、いずれの領域にあってもXとZの差を把握することができ、幾何学的形態測定学的に見れば、両者形態は異なるが形状は概ね同じと言えるであろう。



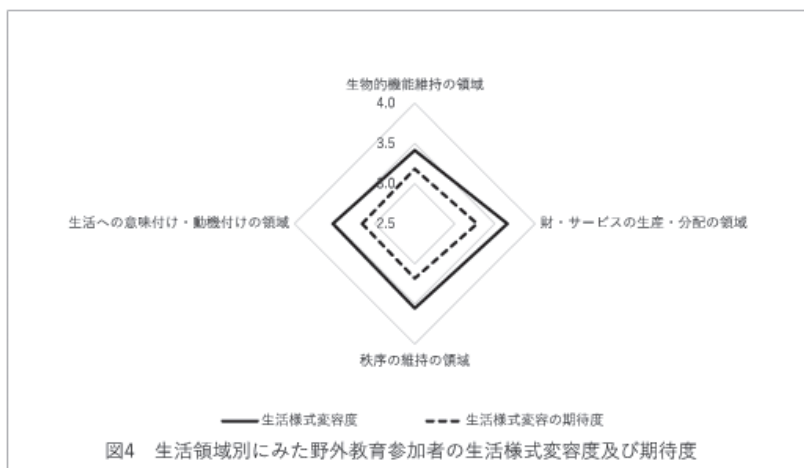


表6 生活領域別にみた野外教育参加者の生活様式変容度及び期待度の差の検定結果

(N=35)

生活領域	X 生活様式変容 度平均値	Z 生活様式変容 の期待度平均値	XとZの差の検 定結果
	(標準偏差)	(標準偏差)	t値
生物的機能維持の領域	3.41 (0.48)	3.18 (0.42)	2.58 *
財・サービスの生産・分配の領域	3.66 (0.56)	3.28 (0.59)	2.72 **
秩序の維持の領域	3.55 (0.66)	3.18 (0.56)	2.91 **
生活への意味付け・動機付けの領域	3.52 (0.49)	3.16 (0.36)	3.54 **

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

表中の数値については、原則として小数第3位を四捨五入した。

#### 4. 考察及び今後の課題

まだ探索的な研究作業に過ぎないが、「新しい生活様式」に応える野外教育の特徴を探るべく、その第1段階の研究作業として、2020年度夏季に実施された事業のケーススタディを行ったので<sup>11)</sup>、その結果と照らしながら上述の検討結果について考察を加え、その上で今後の課題を示すことにしよう。

上述のケーススタディでは「生物的機能維持の領域」にウエイトが置かれているが、

その領域内の生活様式の特徴に変化が見られ、具体的には、「食」に関して食器等を共有しない調理方法に変化しており、「健康の維持」では手洗いや装備等の消毒など衛生環境の保ち方に力を入れるようになっている。

そこで、この「生物的機能維持の領域」内の4項目についてさらに探るべく、前章と同様の分析を行った結果が図5で、項目ごとにXとZの差を把握したものが表7である。この結果によると、「好き嫌いをなく食事をする事ができる」は5%水準、「気候にあわせた服装を選ぶことができる」は1%水準で有意差があるもの、他の2項目は有意差が無かったことから、XとZの差を幾何学的形態測定学的に把握すれば、両者は形態も形状も異なると言える。特に「帰宅時に手洗いうがいをすることができる」に関するXとZの差は殆ど無いが、この項目こそ「新しい生活様式」として習得が求められるに違いない。何故ならば、今回のような感染症に対する人類（特に日本人）の克服の歴史を振り返ってみると、ワクチン開発などの医療上の対策と同時に、人々の教育・学習活動による公衆衛生にかかわる生活様式の習得も見逃せないからである<sup>12)</sup>。調査時期の時点では、このことにそれほど関心や問題意識が持たれていないが、今後のどのような変化が生じるか追跡的に調査及び分析を行っていく必要がある。



表7 項目別にみた野外教育参加者の生活様式変容度及び期待度の差の検定結果  
—生物学的機能維持の領域の場合—

(N=35)

生活領域	X 生活様式変容 度平均値	Z 生活様式変容 の期待度平均値	XとZの差の検 定結果
	(標準偏差)	(標準偏差)	t値
早寝早起きを規則的にすることができる	3.37 ( 0.77 )	3.19 ( 0.50 )	1.24
好き嫌いなく食事をすることができる	3.46 ( 0.70 )	3.16 ( 0.63 )	2.65 *
気候にあわせた服装を選ぶことができる	3.60 ( 0.81 )	3.16 ( 0.57 )	3.44 **
帰宅時に手洗いうがいをすることができる	3.23 ( 0.65 )	3.22 ( 1.13 )	0.03

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

表中の数値については、原則として小数第3位を四捨五入した。

## 注

- 1) 白木賢信 (2006) 「青少年の組織キャンプ目的達成の生活技術習得への影響」『日本生涯教育学会論集』27、pp.91-99、白木賢信 (2015) 「青少年の野外教育の目的達成と日常生活の変容の関係についての考察」『日本生涯教育学会論集』36、pp.113-122、山本裕一・白木賢信 (2018) 「青少年教育施設の宿泊体験事業における運営と成果の関係—国立中央青少年交流の家における教育事業の事例研究—」『日本生涯教育学会年報』第39号、pp.269-286などを参照。
- 2) ここでいう関係構成については、山本恒夫 (2001) 『事象と関係の理論』筑波大学生涯学習学研究室、p.26を参照。なお現在は、山本恒夫 (2013) 「事象と関係の理論」日本生涯教育学会編『生涯学習研究 e 事典』<http://ejiten.javea.or.jp/contentf975.html> (2011年1月11日閲覧)の中に収められている。
- 3) 白木賢信 (2020) 「青少年の野外教育の目的達成と行動様式変容の関係および関係構成の事例検討」『常葉大学大学院国際言語文化研究科紀要』創刊号、pp.29-42。
- 4) 公益社団法人日本キャンプ協会 (2020) 「夏の自然体験活動・キャンプ事業に関する実態調査」公益社団法人日本キャンプ協会ウェブページ [https://camping.or.jp/news\\_release/15527.html](https://camping.or.jp/news_release/15527.html) (2021年1月11日閲覧) 及び独立行政法人国立青少年教育振興機構 (2020) 「新型コロナウイルス感染症流行下における公立青少年教育施設の運営に関する現状調査 (調査結果)」独立行政法人国立青少年教育振興機構ウェブページ [https://www.niye.go.jp/kenkyu\\_houkoku/contents/](https://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/)

- detail/i/146/ (2021年1月11日閲覧)などを参照。
- 5) 白木賢信 (2007)「生活様式枠組と生涯学習研究」日本生涯教育学会編『生涯学習研究 e 事典』<http://ejiten.javea.or.jp/contente385.html> (2021年1月11日閲覧)。
  - 6) Bennett, John W. & Tumin, Melvin M. (1949) *Social Life: Structure and Function*, New York, Alfred A. Knopf, pp.45-59 を参照。
  - 7) 山本恒夫 (1967)「社会教育活動分析の枠組—行動科学的アプローチ—」『国立社会教育研修所紀要』第1集、pp.33-50 を参照。
  - 8) 吉田禎吾 (1958)「文化変容の過程—理論構成上の覚え書—」東京都立大学社会人類学研究会『社会人類学』No. 3、pp.1-16 を参照。
  - 9) 田村光平 (2020)『文化進化の数理』森北出版、pp.207-208 を参照。
  - 10) 独立行政法人国立青少年教育振興機構国立中央青少年交流の家『国立中央青少年交流の家 平成29年度教育事業「富士サマーキャンプ」調査研究報告書』(同発行、平成30年)及び前掲3)を参照。
  - 11) 白木賢信「生活様式枠組による青少年の野外教育の事例研究—「新しい生活様式」に応える組織キャンプの特徴—」日本生涯教育学会第41回大会(オンライン)、2020年11月14日。
  - 12) 例えば、1918年に始まったスペイン・インフルエンザ(いわゆるスペイン風邪)の場合、ポスター、活動写真(映画)、弁士の解説、印刷物などによる、各道府県(当時)独自の健康維持のための公衆衛生への取組を確認することができる(内務省衛生局編(2008(1st 1922))『流行性感冒—「スペイン風邪」大流行の記録』平凡社、pp.188-249を参照)。

(2021年1月12日 受理)